設問一　次の四字熟語の空欄□に入る漢字を後の選択肢から選び、記号で答えなさい。

1　鶏□狗盗　　2　巧言令□　　3　山□水明

4　月下□人　　5　言語□断　　6　付和雷□

選択肢　ア　色　イ　道　ウ　鳴　エ　紫　オ　同　カ　水

設問二　次の意味を表すことわざ・慣用句を、後の選択肢から選び、記号で答えなさい。

1　人知れずよいことを行う者には、必ず目に見えてよいことが返ってくる。

2　前ぶりの騒ぎばかり大きくて、実際の結果は極めて小さいこと。

3　明確な返答や処置をしないで、その場をごまかす。

4　遠大な事業や計画を始めるときには、まずは手近なところから着手するのがいい。

5　頼るならば、勢力のある人の方がよい。

6　判断を保留にする。

7　心に少しもやましいところがない。

8　貴賤貧富の運命は、かわるがわる誰にも巡ってくるものだ。

選択肢　ア　仰いで天に愧じず　　イ　寄らば大樹の陰　　ウ　先ず隗より始めよ

エ　括弧に入れる　　オ　大山鳴動して鼠一匹　　カ　世は回り持ち

キ　左右に託す　　ク　陰徳あれば必ず陽報あり

設問三　次の文章を読んで後の問に答えなさい。

都市は人間が自然とともにつくった環境である。したがって誕生のときから、都市には、人間の意思、欲望、そして技術のあり方が反映してきた。しかし都市は一直線に拡大したわけではない。たとえば都市の人口規模を見ると、古代から中世にかけローマや中国、イスラムなどの帝国都市はすでに一〇〇万人に近い規模に到達していたとされる。対照的に、近世以降のヨーロッパ都市は、パリなど一部の例外を除けば、規模は数万人程度に限られていた。その状況を一変させたのが一九世紀以降の技術革新と産業化であった。工業、身分制を脱し移動を始めた群衆、テクノロジーを組み合わせた空間をいかに構想しそれに形を与えるか。(1) 巨大化していく都市を前に、都市建設の実践知が世界各地で積み重ねられていく。体系化された実践知とそれに基づく制度が、権力の新しい基盤として都市へと埋め込まれていった。ここでは東京にもつながる三つの①ケイフを挙げておこう。第一は、国家の政治権力と結びついた象徴的空間建設の実践である。一九世紀半ば、ナポレオン三世治下で進められたG―E・オスマンによるパリ大改造、同時期にロンドンやパリで始まった万国博覧会のようなメガイベント、列強による植民地都市開発、そして二〇世紀になって誕生した社会主義やファシズムの国家を象徴する巨大なモニュメント建設。タイプは異なるものの、近代国家の権力を空間的に具体化する試みが、「都市を計画する」という知の形成をとりながら世界各地で制度化されていく。明治初め、銀座煉瓦街、バロック都市計画を模した官庁

計画、そして市区改正事業が、お雇い外国人の手も借りながら立て続けに東京で試されていた。振り返ってみると明治初期東京の首都計画とは、実は欧米でほんの少しだけ早く展開していた実践をいち早く異郷へと差し替える試みであったことがわかる。第二に、産業化によって生まれた巨大都市をいかにコントロールするか。拡張する都市を再設計する試みが、ガーデンシティ（田園都市）やニュータウン、住宅団地などを郊外で生み出していく。もともと「反都市」や「都市ユートピア」をめざす意図によって導かれたこうした空間的実践は、皮肉にも、大都市をさらに巨大化させてしまう原動力となる。第三に、産業化する社会にふさわしい高密度・均質の空間を現実化していく実践が、建築構造や資材、エレベータや空調などの技術革新によって支えられながら、都市を垂直的に拡大させていく。ここで重要なことは、技術やモノは人の手を離れて遠距離を容易に移転していくという点である。結果的に、異なる歴史文化や自然環境のもとで、ローカルな環境とは無関係の類似した建築物が、世界各地で増殖していく。並行して建築家は、単体の建築物だけでなく都市をつくる実践の担い手として、その影響力を強めることになる。後に東京・上野の国立西洋美術館（一九五九年竣工）を設計したことでも知られるル・コルビュジエは、その[6]端緒となったひとりであった。戦災による破壊から出発した戦後日本、とりわけ東京は、建築的実践が社会に介入する試みにとって、世界的に見ても主要な実験場のひとつとなる。この舞台から丹下健三、黒川紀章、磯崎新ら多くの建築家が登場し、世界各地へと進出をしていくきっかけをつかんでいった。

だが、都市はモノであると同時にヒトでもある。都市は、機能を実現する手段であると同時に、夢（悪夢も含め）や理想が試される舞台でもあった。「アーバン・スタディーズ」という名を冠した研究センター（Harvard-MIT Joint Center for Urban Studies）が、ハーバード大学とマサチューセッツ工科大学の共同により誕生したのは一九五九年のことだった。一九五〇年代、アメリカでは大都市都心の老朽化した住宅を「スラム」と見なし全面撤去のうえ高層住宅団地へと建て替える事業が、連邦政府によって進められていた。両大学が立地するボストンでも、イタリア系移民の集住地域で同様の再開発事業が進められていた。しかし、外部からスラムと見なされた場所は、現実には移民コミュニティの強い紐帯が残る「都市の村人」の住処であった。街をまるごと壊す再開発は、「フェデラル（連邦政府の）・ブルドーザー」としてきびしい非難を浴びた。経済的価値や工学的発想だけで決めてしまうと都市は肝心なものを見落としてしまう。一九六〇年代、[7]都市をめぐる価値観の転換は世界的に大きな潮流となっていく。大規模な再開発ではなく既存の街並み保全の意義を主張し試されるJ・ジェイコブズ（一九一六―二〇〇六）の『アメリカ大都市の死と生』が刊行されたのは一九六一年であった。ほぼ同じ時期、アメリカでは人種差別の撤廃を求める公民権運動やフェミニズム運動、エコロジー運動などが大都市を変化の渦に巻き込んでいった。シカゴで草の根から住民を組織する運動を長く展開していたS・アリンスキー（一九〇九―七二）のアプローチも注目を集め、それは住民運動が叢生しつつあった日本にも紹介された。一九六二年、東京大学工学部に、従来からあった建築学や土木工学の学科とは別に都市工学科が新設された。新しい学科を担ったのは丹下健三ら意欲的な研究者・建築家である。東京湾岸に伸びる海上都市プランを含む「東京計画一九六〇」が丹下健三らによって発表されたのは、前年一九六一年のことであった。都市に関する研究はもともと工学から社会科学、美学やアートにまたがる。それゆえ世界的にみれば、大学内でも文理を超えた横断的分野として位置づけられることが珍しくない（ハーバード、MIT もそうであった）。これに対し、日本では都市計画や都市研究はおもに工学的領域へ位置づけられてきた。こうした特質は、日本の都市計画や都市研究のあり方に、[8]ユガみも含めた独特の特徴をもたらす。

A 変化は日本でもうねりを見せ始めていた。「闘争」の[9]ヨインがキャンパスにまだ残る一九七〇年、同じ東京大学工学部の建物では、科学者の立場から公害や環境問題を批判的に論ずる公開自主講座「公害言論」が開

始された。中心にいたのは、都市工学科で衛生工学の助手を務める宇井純らであった。高度経済成長が続くなか、公害や乱開発が引き起こす問題を前に、市民や住民の立場から課題に取り組む動きは、革新自治体の台頭とも相まって、都市をめぐる知の構図を日本でも変え始めていた。

都市とは何か。都市は人間にとってどのような意味をもった世界なのか。改めて根源的な問いが一九七〇年前後から世界的に噴出してきた。(iii)革新を迫られた都市研究の先端を追いかける試みのなかからやがて、変革に向けた知の挑戦者たちが世界各地で現れる。

第二次世界大戦後、先進国の大都市は復興を経て繁栄を⑤謳歌していた。それを支えたのが大量生産によって成長を遂げた製造業であった。ただし生産だけでは経済は循環しない。膨大な商品をいかに消費し続けるか。そこに姿を現したのが大量消費の担い手としての中間層、そしてその生活様式を実現する舞台としての郊外社会であった。自動車は時代を象徴する商品となる。フォードが実現した生産システムにちなんでフォーディズムと呼ばれた蓄積様式は、工場を飛び出し都市空間全体へと投影されていく。

だが一九七〇年代、欧米先進国大都市は大きな壁にぶつかる。日本を含む⑥シンコウコクとの競争激化や生産拠点の海外移転、それに伴う脱工業化と都心の衰退、人種・民族的な対立激化、公害や環境問題、解決にあたる政府の財政危機などが、互いに連関しながら問題を深刻化させていった。

都市問題の原因は都市の内部だけを見ても理解できない。現代都市をめぐる研究はここから、新しいステージへと足を踏み入れていく。

資本制都市はいかにして危機を脱しようとしたのか。ひとつの方向が、脱工業化する都市内部において蓄積の新しい基盤を再構築することであった。そこで着目されたのが、衰退した都心や遊休化した工場跡地、臨海部を再開発し商品化する試みである。工業生産に代わり建造環境の生産・流通・消費が、資本蓄積の中心のひとつに据えられていく。イギリス出身の地理学者D・ハーヴェイは、これを「(iv)資本の第二循環」と名付けた。

問題はこの新しい循環の拡大が何をもたらすかであった。供給された空間が流通・消費され続けなければ循環は完結しない。ここでハーヴェイが指摘したのは、都市空間のあらたな⑦フカ価値創出のメカニズムであった。人びとが魅力を感じ続けるためには、空間はつねにあらたな価値をもたなければならない。だが大量消費がすでに一般化した今日、単に機能だけでは人を引きつけられない。商品としての空間にはそれ自体の魅力をもち続けることが要求される。そこで選び取られた戦略が、機能的には意味がない奇抜なデザインや思わせぶりな記号、場所にまつわる「物語」や象徴を空間に付与しながら、都市を再開発していくことであった。結果的に、人びとのニーズから離れて差異が増殖され、都市全体がポストモダニズムの空間へと変容していく過程を、ハーヴェイは鋭く描き出した。

しかしそこには問題があった。再開発は、もとの地価が安い場所であればあるほど値上がりで得られる⑧利潤(差額地代)が大きくなる。そのため開発業者は、地価が相対的に低い工場街や労働者居住地にしばしば目をつけた。富裕層や中間層を引きつけるため、地域のイメージ転換が試みられ、そこでは芸術家のアトリエやアート作品が関わる文化戦略がしばしば活用された。しかし、イメージが刷新され富裕層の注目を集めるようになると地代が上がる。結果的に低所得の住民や貧しい芸術家は退去を迫られてしまう。空間利用の「高級化」(ジェントリフィケーション)と排除がこうして進行する。格差と不平等の問題が都心部において先鋭化していった。

もっとも(v)外見の差異化戦略だけでは魅力はすぐに失われてしまう。実際、奇抜なポストモダン建築のブームは長く続かなかった。資本主義都市の空間形成は蓄積をもたらす生産活動と結びつかなければ持続が難しい。どのような新しい活動と都市を結びつけるのか。ここから新しい空間戦略が世界的に広まっていく。

時代は一九八〇年代にさしかかっていた。東西冷戦の⑧カンワ、グローバリゼーション、新自由主義の台頭、軍事から民間へ転用された［　B　］の普及と情報環境の激変など、あらたな変化が連鎖的に始まっていた。激動の渦のなかで都市はその意味と位置、役割を大きく変化させていく。

興味深いのは、東京がこの時期、日本にとってばかりでなく世界的な都市動向にとっても、象徴的な地位を占めていたことである。たとえば、S・サッセンが一九九一年に公刊し世界的に読まれた『グローバルシティ』は、その対象としてニューヨーク、ロンドンと並び東京を取り上げた。極東の東京が新旧覇権国家の中心都市と「並ぶ」ということ自体が、地球規模の変化の根拠とされたわけである。はたしてサッセンの選択は正しかったのか。

そして今日、二一世紀前半の成り行きを見据える段階まで私たちは到達しつつある。都市の新しい特質がそこではしだいに明らかとなりつつある。

第一に、一段と急激な都市化が中国そしてアフリカを始めとするグローバル・サウスにおいて進行しており、それはまさに地球という惑星規模（プラネタリー）の環境変化をもたらしている。

第二に、国家の規定力が相対的に低下するなか、それに代わる活動テリトリーを探索する個人や企業の試みがグローバル化という形をとって噴出した。そのなかで、歴史的ストックをすでに備えた活動単位としての「都市」の有用性が、改めて発見されるようになった。

第三に、ただし、サイバー空間の台頭により、⑨リアルな都市の機能・意味は大きな変容を迫られている。いまや、「都市」という形式自体の再創造が世界的な共通課題となってきている。

第四に、以上の動向が複合化した結果、メガシティとも呼ばれる巨大都市建設をめぐる流れが、激しい競争を伴いながら地球規模で加速させられている。

第五に、しかし現実の都市には、貧困や格差、膨大な産業化インフラや建造物の老朽化、巨大ゆえのリスク・破壊問題の深刻化（環境、災害、テロ、戦争、パンデミック等々）など新しい取り組みを必要とする課題が山積している。

そして最後に、以上の歴史的・文明的課題に直面するなかで、問題解決に関わるガバナンス形成や民主的な「公共空間」構築をめざす運動にとって、都市は新しい実験と挑戦の舞台となっている。

インターネットに代表されるようなサイバー空間の拡大により、人びとのつながりの形は大きく変化した。ひと昔前ならば、流行や先端のモードが⑩流布する最初の舞台は、多くの人が集まる都市であった。しかしいまではそれがインターネットの世界となっていることに、多くの人が同意することだろう。「フロー（流れ）の空間」に沿って変化が加速化される社会において、都市はむしろ確実に「遅れ」始めている。

ただし速度を増す社会とは、すべての要素が加速化してしまう社会ではない。そうではなく、速さを増していく要素が、いつまでも「遅い」ままの要素と共存し⑪葛藤を繰り返す社会として姿を現す。ヴァーチャルな要素はいつまでも尾を引くマテリアルな要素と衝突を繰り返す。しかし同時に、ヴァーチャルな要素はマテリアルな要素によって支えられてもいる。

なめらかに滑る「空間」のなかに、ごつごつと残ってしまう鈍い「場所」としての特質を、都市は持ち始めている。合理的に計算された建造環境として堅牢さと機能性を兼ね備えると見なされた近代都市が、依然として「もろさ」と紙一重であることを、私たちは震災、テロ、パンデミックなどの出来事を通じて再認識させられてきた。「鈍さ」をもった都市くのいらだちや恐れは、ともすれば管理や監視に向けた欲望を限りなく亢進させてしまう。

身分制や地域共同体の縛りを解かれた人びとが群衆となって移動を始めたとき、近代都市は人間にとって第二の故郷となった。近代都市は、誰でもが居場所を見つけられる場としてあるはずだった。だが、「第二の近代」と

呼ばれる時代になって、状況は複雑化する。グローバル化やデジタル化によって情報上の身体はどこまでも拡張させられていくのに対し、生身の身体はリスク社会や個人化のもとで、むしろ徹底的に個別化され管理される。人びとの居場所はどう変容を遂げるのか。現段階の都市の課題がここにある。

都市はゆっくりと確実に、(四)新しい質を持ち始めている。

〔町村敬志『都市に聴け　アーバン・スタディーズから読み解く東京』株式会社有斐閣、二〇二〇年〕

問一　二重傍線部①～⑪について、漢字は読み方をひらがなで、カタカナは漢字で書きなさい。

問二　傍線部（i）「巨大化していく都市を前に、都市建設の実践知が世界各地で積み重ねられていく」なかで、第二次世界大戦後の東京が主要の地位を占めた理由として、最も適切なものをひとつ選びなさい。

1　住宅団地などを郊外に生み出したから。
2　技術やモノは遠距離を容易に移転するから。
3　戦災による破壊から出発したから。
4　お雇い外国人の手を借りていたから。

問三　傍線部（ii）「都市をめぐる価値観の転換」が行われた理由を、できるだけ文中の言葉を用いて、八〇字以内で説明しなさい。

問四　空欄 A に入る語としてふさわしいものをひとつ選びなさい。

1　ただし
2　ところで
3　つまり
4　それゆえ

問五　傍線部（iii）「革新を迫られた都市研究の先端」として最も適切なものをひとつ選びなさい。

1　大量生産によって成長を遂げた製造業と中間・富裕層による大量消費。
2　工学から社会科学、美学やアートをまたぐ横断的分野として位置づけること。
3　技術革新によって支えられながら、都市を垂直的に拡大させること。
4　脱工業化する都市内部において蓄積の新しい基盤を再構築すること。

問六　傍線部（iv）「資本の第二循環」が都市にもたらしたものを、できるだけ文中の言葉を用いて、いずれも一五字以内で二つ答えなさい。

問七　傍線部（v）「外見の差異化戦略」として、最も適切なものをひとつ選びなさい。

1　臨海部の再開発
2　ポストモダン建築
3　フォーディズム
4　海上都市プラン

問八　空欄 B に入る語として最も適切なものをひとつ選びなさい。

1　パンデミック
2　ヴァーチャル
3　メガシティ
4　インターネット

問九　傍線部（vi）「リアルな都市の機能・意味」として、かつての都市が担っていたものをひとつ選びなさい。

1　第二の故郷
2　管理や監視
3　身体の拡張
4　堅牢さと機能性

問十　傍線部（vii）「新しい質」として、最も適切なものをひとつ選びなさい。

1　新自由主義
2　グローバリゼーション
3　鈍い「場所」としての特質
4　デジタル化

国語　解答用紙

設問一

1	
2	
3	
4	
5	
6	

設問二

1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	

設問三

問一

①	②	③
④	⑤	⑥
⑦	⑧	⑨
⑩	⑪	

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

問十

受験番号

氏名